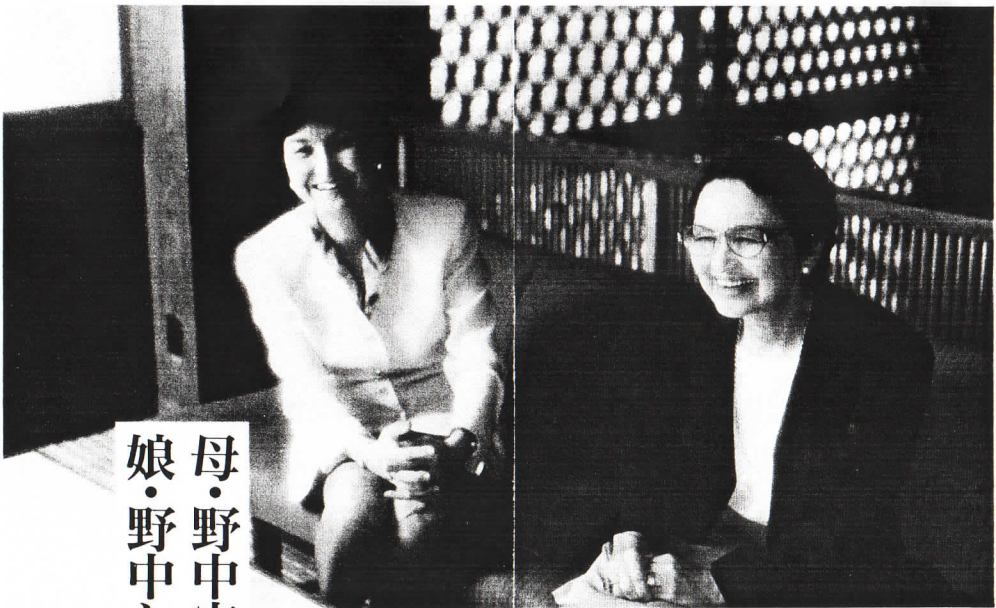


いつもそばにいる 空気みたいな存在



母・野中安子さん(70歳) 娘・野中ともよさん(42歳)

野中ともよさんは東京生まれ、前大学大学院文学研究科博士前期課程修了、77年米国ミズーリ・コロンビア大学大学院留学、フットボールナリスムを学ぶ。79年からNHK、テレビ東京などの超テレビキャスターとして活躍。現在は夫、娘と東京・青山に住む。母の野中安子さんは父と入道、赤坂暮らし。

他人と話すような気がしました」

野中さんをつんだ母、価値観は今、娘のまわりなさんを受け継がれている。大学までの一貫教育で知られる小学校に通い始めたころだが、「きつと高校あたりで、やりたいことを自分で見つけて、別の道歩き出すはずだと構えています。母が私に接したように、私もまわりなりに接していますから」。

キャスター休業から1週間、いつもなら仕事場に向かうはずの夕刻、野中さんは電話口の母親に「声が柔らかくなった」と言われた。次の仕事の能取りを、母親に「事後談」するまで、

母のメッセージを咀嚼し直す日が続く。
子供という「仲間」がいるから
喜びも楽しみも味わえる

背中がすくと伸びた立ち姿、気品あふれる物腰、野中安子さんがフロアの端から現れると、周囲の空気がおたやかに華やいた。

「できた人、私なら3時間ともたないような姑に20年以上仕えてきたのに、いつもニコニコ。70歳ですけど、エネルギーは私の40倍ありますね」
数分前にそう野中さんが語ったとおり、年齢より若く見える。

一日電話をしなかっただけで「久しぶり。元気だった」と言い合うほど、野中ともよさんは母の安子さんと親密。何かの決断の際も母の姿をよぎる。

実は、野中さんは9月に、4年間続けたビジネス情報番組「ワールド・ビジネスサテライト」のキャスターを辞めた。1年ほど前から体の警告は感じていた。が、引き金となったのは、8月に安定期に入った第2子を流産したことだった。執筆などの仕事は続けるが、秒刻みて動くテレビの現場から、半年ほど遠のこうと決めたのだ。

「仕事の決断なので自分でしましたが、母は理解してくれと思いません」
案の定、安子さんは賛成した。野中さんを応援する半面、仕事以外に主婦母親業をこなす、3、4時間の睡眠で働く娘を憂慮していたのだ。

真つ先に相談しなかったものの、決断する時は母親を意識した。
「トータルな人格形成で母に負うところは大きいので、働く母のシャキッとした背中と、温かく受け止めてくれる胸を見て育って、今の私がある。私も娘に両面を見たいのに、胸の部分が必要ないと気づいたんです」

節目この「ママならどうするだろう」という一人問答は、体内言語のように組み込まれているという。自分で99%決めたことでも、最後は母に相談する。「心底、意見を聞くという形の親孝行」でもあるが、そのくらい「深く信頼している」のだ。車で10分の距離に住むなどの物理的理由によるだけではない絆がある。

「最近逆転しまして、私が娘を頼っています。買い物相談などね」
開く一番、安子さんはこう語る。

「娘が家を空けると、東京のそこだけがほつかり穴が開いている感じが。安子さんはかつて、嫁として姑に仕え、家を切り回す傍ら夫の仕事を手伝い、2人の子供には母親として習字や自己を持つ」。

安子さんは、お手伝いさんがういする豊かな家で、7人兄弟の3番目として育った。「働けるのは、傍（はた）を棄にする」という大事なこととの信念を持つ父親から、礼儀作法と気働きを叩き込まれ、母親からは優しさを譲り受けたという。

その後、結婚して2児の母となった安子さんは、「夫婦の価値観の違いが子供をより進歩させる」と信じてきた。「考えたことを実行できる人になってほしい」という子育ての基本方針は一致した夫婦だったが、夫は西洋的な個人主義の感覚の持ち主だった。
「夫は、女の子である前に一人の人間だ。男を兼ねるより、まず自分を鍛えて自立した人間になれる」とい人。お辞儀の仕方を教えていると「こ

子供の人格を尊重し
何事も自分で選ばせてくれた

母への信頼感は、日々育まれてきた。「人格を尊重するんです。私が3歳の頃でも、例えばリボンをいくつか並べて、「どれが似合うと思う？」と聞く。「おリボンはお洋服と合う方がきれいよな」と言い添えて、最後は自分で選ばせるんですね」

「何事も自分で選ばせてくれた」

「結婚前は母の掌の上で遊ばされているんですよ」
「娘を育てるといのはずつと昔の話で、今は娘を頼っています」

「子育ての要は、親」を押しつけないこと。子供がいてくれるから喜怒哀楽が味わえると思えば、何でも乗り越えられる。子供は仲間なんです。自らの労を「喜び」と感じる安子さんに、現在の野中さんありなのだ。

「結婚の時です。留学先で知り合った夫のことを理解してもらおうのに2年かかりました。話しても通じず、初めてうでもない」と言っています。
「子育ての要は、親」を押しつけないこと。子供がいてくれるから喜怒哀楽が味わえると思えば、何でも乗り越えられる。子供は仲間なんです。自らの労を「喜び」と感じる安子さんに、現在の野中さんありなのだ。

「将来何をするか、なんてあなたの人生のなかで見つかるもん。そんな私の仕事じゃないでしょう」
「考えてみたら、私がまわりなと同じ向き合い方をしています」

「子育ての要は、親」を押しつけないこと。子供がいてくれるから喜怒哀楽が味わえると思えば、何でも乗り越えられる。子供は仲間なんです。自らの労を「喜び」と感じる安子さんに、現在の野中さんありなのだ。

「子育ての要は、親」を押しつけないこと。子供がいてくれるから喜怒哀楽が味わえると思えば、何でも乗り越えられる。子供は仲間なんです。自らの労を「喜び」と感じる安子さんに、現在の野中さんありなのだ。

「子育ての要は、親」を押しつけないこと。子供がいてくれるから喜怒哀楽が味わえると思えば、何でも乗り越えられる。子供は仲間なんです。自らの労を「喜び」と感じる安子さんに、現在の野中さんありなのだ。